

ポストコロナ時代における都心の「情緒的価値」－広島市を事例として－

地域づくりグループ長／主席研究員

吉田 実



人口の流出が拡大する広島市

広島市は人口約120万人を擁する中国地域最大の都市であるが、人口は減少傾向にあり、近年は転出者数が転入者数を上回る転出超過（社会減）となっている。「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数調査（総務省）」によると、広島市の2021年1～12月の転入超過数は-3,411人で、同様に地方ブロックの中核都市である福岡市の+6,178人と比べ、その差は顕著である。男女年齢階級別に見ると広島市と福岡市の差はより顕著であり、福岡市が男女とも15～29歳が大きく転入超過となっているのに対し、広島市は15～19歳の男性、65歳以上の女性でわずかに転入超過であるものの、そのほかの全ての性別・年代で転出超過となっている。（図1）

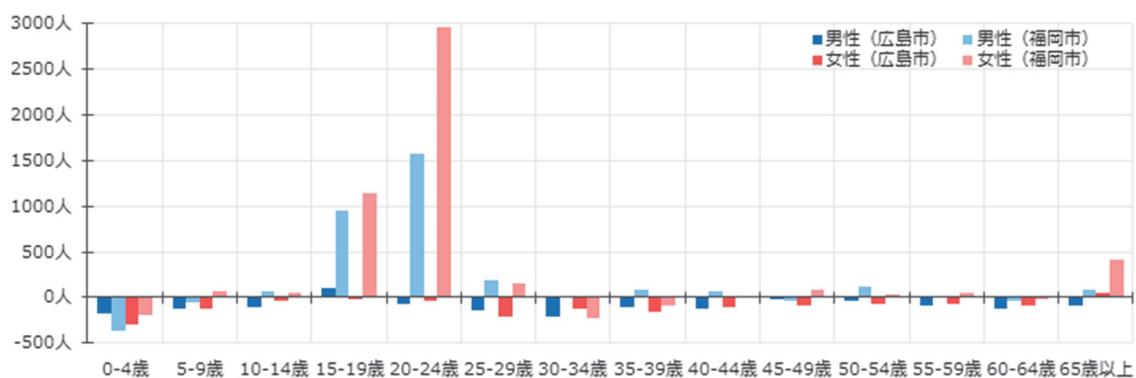


図1 年齢階級別転入超過数（2021～2022、広島市・福岡市）

（資料）住民基本台帳人口移動報告（総務省）

こうした傾向は、広島市が県内の他市町からの就職や進学の受け皿となって県外への人口流出を防ぐ「人口のダム機能」を果たすことができていないことを意味しており、周辺市町を含めた広島県全体の人口減少の加速が懸念される状況にある。人口流出には様々な要因が複合的に関係していると考えられるが、その要因の一つに、圏域内外から人を惹き付けることのできる都心の魅力が不足していることがあげられるのではないだろうか。

都心に求められる価値の変化

新型コロナウイルス感染症の世界規模での拡大は、経済・社会全体のあり方とともに、人々の行動様式や意識・価値観に大きな変化をもたらした。特に、移動や行動が大きな制限を受ける中で、テレワークを含む在宅勤務や、ビジネス・娯楽・消費など様々な活動における

るオンラインの活用が急速に進み、人々が都心に出てくる機会が減少した。2022年8月に当研究センターが広島都市圏の住民・事業所に対して実施したアンケート調査では、週1日以上の在宅勤務を希望している人は全体の約6割であり、約2割の人が実際に在宅勤務を実施している。(図2)一方で、テレワークを実施している事業所は約4割で、このうち7割を超える事業所が今後も実施する予定としている。(図3)また、テレワークを実施する理由として「生産性の向上」や「ワークライフバランスの向上」をあげる事業所が多く、働き方改革の一環として実施されている側面が強い。(図4)こうしたことから、テレワークを含む在宅勤務は今後も一定程度定着すると考えられ、業務をはじめとした都市機能の集積により、都心に自然と人が集まる時代ではなくなってきてていると言える。

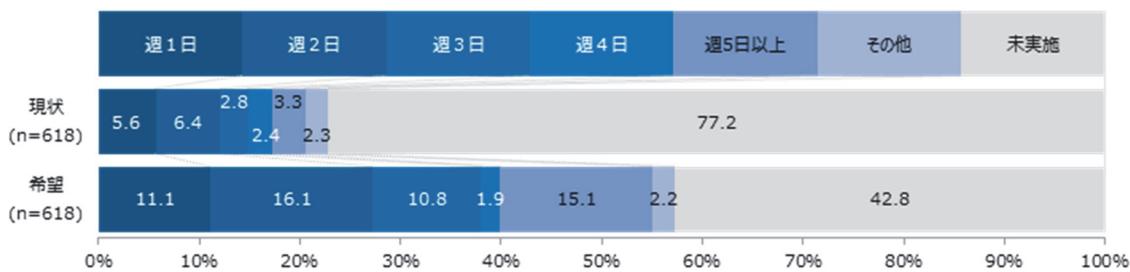


図2 在宅勤務の実施状況と希望 (広島都市圏住民、会社員等)

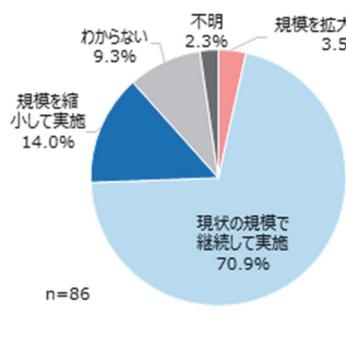


図3 今後のテレワークの実施予定
(広島都市圏事業所)

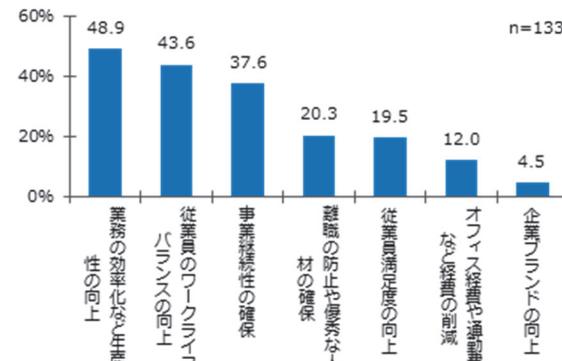


図4 テレワークを実施または検討する理由
(広島都市圏事業所)

(資料) ポストコロナ時代の都市圏づくりの方向性に関する調査研究

((一社) 中国経済連合会、(公財) 中国地域創造研究センター、中国電力(株))

このような変化の中で、これから都心に求められる価値とは何か。

今回のアンケート調査では、テレワーク経験者の約3割が、癒しやリラックスなどの体験や休日の外出をコロナ前よりも重要だと感じるようになったと回答している。つまり、外出しなくても良い仕組みやツールができた一方で、外に出て、オンラインでは得られないリアルな体験をすることの価値が高まっているとも言える。また、同じく約2割の人が、仕事でのコミュニケーションや友人・知人との交流などのリアル活動をコロナ前よりも重要だと

感じるようになったと回答しており、人とのつながりや交流の価値も見直されている。(図5)多くの人・モノ・情報が集積する都心は、多様な交流の機会やそこでしか得られないようなリアルな体験を提供できるポテンシャルを持っており、こうした機能を伸ばしていくことが都心の価値につながると考えられる。

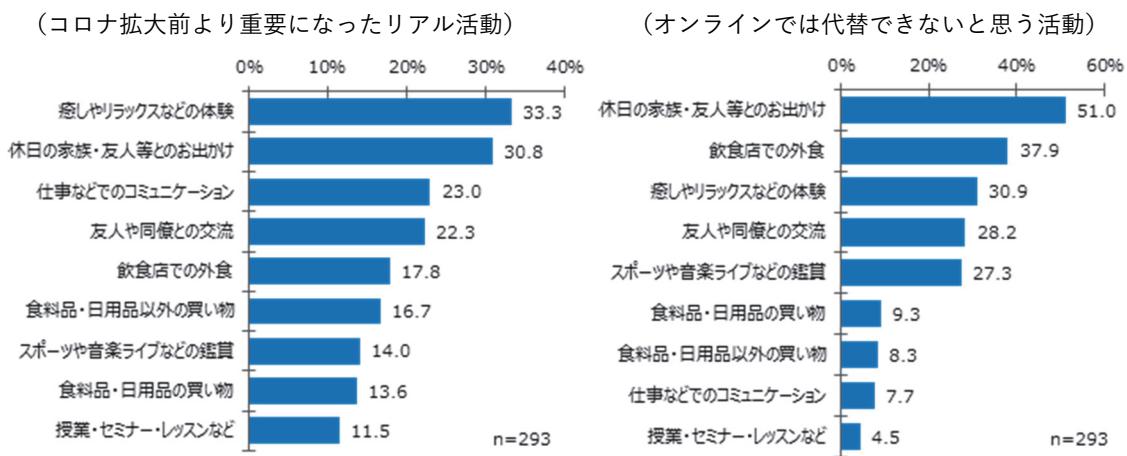


図5 リアル活動に対する意識（広島都市圏、テレワーク経験者）

(資料) ポストコロナ時代の都市圏づくりの方向性に関する調査研究

((一社) 中国経済連合会、(公財) 中国地域創造研究センター、中国電力(株))

また、コロナ禍における三密回避をきっかけに屋外空間の活用が広まっており、全国的にも道路などの屋外の公共空間を活用したさまざまなアクティビティの提供が試行されている。(図6) 都心には多様な公共空間が存在する一方で、これまであまり活用されておらず、こうした公共空間を都市のゆとり空間として、多様な目的で使うことができる場としていくような都市空間づくりも、都心の価値として求められている。



図6 街路空間活用の事例
(丸の内ストリートパーク)

かつて米国の活動家ジェイン・ジェイコブズは、著書「アメリカ大都市の死と生」(1961年)の中で、大街区の再開発や用途規制による画一的な都市開発を批判し、都市の多様性を生み出すことの重要性を提唱しているが、同じように、ポストコロナ時代においても、人を惹き付ける都心の魅力創出には、「多様性」や「寛容性」といった視点が求められている。そのためには、都市機能の集積により生み出される「利便性」「経済性」のような定量的に評価される価値だけではなく、感性に働きかける価値（情緒的価値）が重要なのではないだろうか。

広島市都心の個性と不足している魅力

前述のアンケート調査においては、広島都市圏と福岡都市圏の居住者各 1,000 人に対して、居住エリアの都心（広島市・福岡市）での経験・体験、都心にある場所を尋ね、スコア化を行った。都市規模の違いが大きいこともあり、残念ながら広島市のスコアはほとんどの項目で福岡市を下回っているが、広島市の平均スコアを基準に、各項目のスコアを相対的に比較すると、広島市都心の強み・弱みの一端が伺える。

都心での経験・体験として比較的多いのは、「プロスポーツや音楽ライブに興奮、感動した」「商店街や飲食店から美味しい匂いがした」「木陰で心地よい風を感じた」「買い物中に店の人との会話を楽しんだ」「公園や水辺で緑や水に直接触れた」などであり、プロスポーツの観戦やローカルなお店での買い物・飲食、自然を感じられることなどは個性のひとつと言える。一方で、経験・体験として特に少ないものとして、「様々な業種の人と仕事を離れて交流した」「ためになるセミナーや市民講座に参加した」などがあり、交流や自己実現の機会が少ないと考えられる。また、「美術館や博物館で鑑賞した」「ミシュランや食べログで評判の店で食事した」などの文化的な経験・体験も少ないが、これは、文化的資源の集積が少ないというよりも、知られていないことによるものと思われる。（図7）

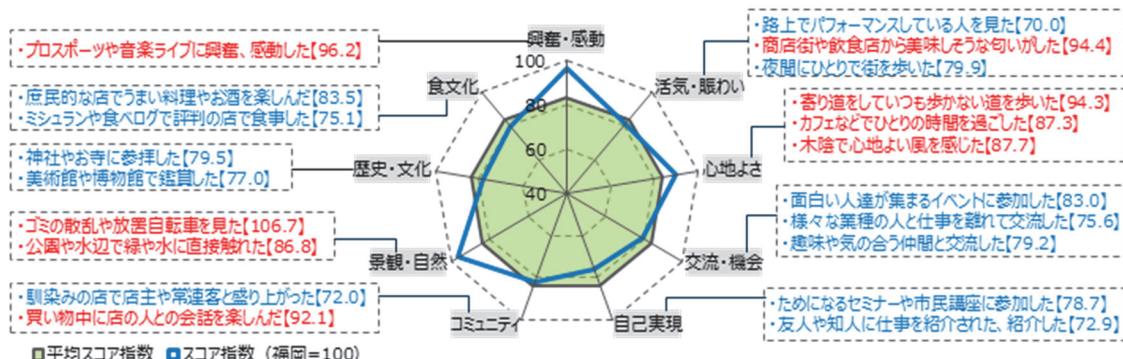


図7 広島市都心での経験・体験の有無（広島都市圏住民、福岡市都心との相対評価）

（注）スコアは各設問の回答について、頻繁にある=5 点、たまにある=3 点、1~2 回はある=1 点、ほとんどない=0 点により計算し、福岡=100 としたときの指標として表示。

（資料）ポストコロナ時代の都市圏づくりの方向性に関する調査研究

（（一社）中国経済連合会、（公財）中国地域創造研究センター、中国電力（株））

また、都心にある場所の認知度として比較的高いのは、「ショッピングモール」「ファーストフードや全国チェーンのカフェ」「大規模なコンサートホール」「プロスポーツを観戦できる施設」などであり、全国規模の店舗や広域的な集客施設など、一般的に都心に集積する施設については、都市規模なりの集積があると言える。このほかでは、「活気のある商店街」「散歩が楽しめる遊歩道や緑道」などの認知度も高く、ローカルなお店や自然環境は、ここでも都心の個性のひとつとなっている。一方で、「いろいろな使い方のできる広場」「気軽に休憩できるベンチなどがある空間」など自然環境を活用したゆとり空間の認知度は低く、こうした個性を活かした都市空間づくりが十分にできていないことが考えられる。このほか、

体験・体感型の施設やビジネス交流施設についての認知度も低く、これらも不足している魅力のひとつと言える。(図8)

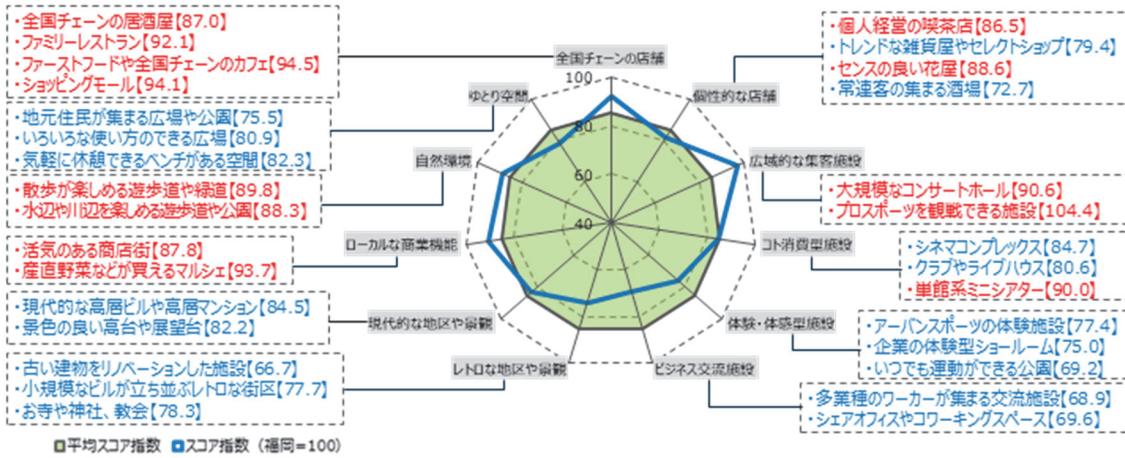


図8 広島市都心にある場所（広島都市圏住民、福岡市都心との相対評価）

(注) スコアは、各設問の回答について、たくさん知っている=10点、少しあは知っている=5点、ほとんど知らない=0点により計算し、福岡=100としたときの指標として表示。

(資料) ポストコロナ時代の都市圏づくりの方向性に関する調査研究

((一社)中国経済連合会、(公財)中国地域創造研究センター、中国電力(株))

「広島らしさ」を活かした都心の魅力創出に向けて

このように、広島市都心は都市規模なりの商業や集客機能が集積しており、プロスポーツや豊かな自然環境、ローカルな店舗の魅力などが都市の個性となっている。その一方で、多様な交流や自己実現、さまざまな体感・体験の機会、豊かな自然環境を活かしたゆとり空間といった、これからの中心に求められる機能の集積が弱い。都心の価値として個性や多様性が求められる時代にあっては、画一的になりがちな商業や集客といった従来の都市機能の集積を高めていくことよりも、「広島らしさ」を活かしつつ、交流・体験・ゆとりなど、多様な都市機能の広がりが求められるのではないだろうか。

そのための具体的な取組として、例えば、広島らしさの象徴である川辺空間が日常的に活用できるための仕組みづくり、多様なバックグラウンドを持つ人たちによる多層的な交流が図られる場づくり、プロスポーツをはじめとしたそこでないと得られない体験が得られる機会の提供などが考えられる。

現在、広島市都心においては、広島駅ビルの建替えやサッカースタジアムの整備をはじめとした様々な開発事業が実施、あるいは計画されている。こうした都市再生の動きの中で、都心の新たな価値を生み出す多様な機能が挿入され、多くの人を惹き付ける都心へと再生されることを期待したい。